

# みんなで人権<sup>じんけん</sup>を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

## 「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ—人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

「あなたはたった一人になっても出しますか？」  
「はい！」

絵本『いのちの花』の初版本を自費出版したのは、平成13年2月14日である。それからあつという間に25年のときが流れた。若い人たちと学習会などで話している、ふと自分の歳を思い出し、精神的な成長のなさに、自分でびっくりしてしまう。ときは、人や記憶を押し流していくけれど、タイトルの言葉は、「原爆の図」の画家の丸木俊さんと最後の会話であるから決して忘れない。たとえ何があっても忘れがたい、大切な言葉である。

部落差別を一度も受けたことのない私が、過酷な部落差別の史実である「寛政義民松原五人衆」を詩に書いた。物心つくころから、「ことは敵だ」と思っていた私が、なぜか部落問題に出会って20年が過ぎたころ、40代で「五人衆」のことを表したくなり、詩を書きはじめた。働きながらの夜なべ仕事で居眠りしながら、書いては捨てるの連続だった。

あるとき、福岡市美術館で「原爆の図」の展示中に丸木俊さんの講演があった。それを聞いて、楽屋に俊さんを探しに行き、「私の詩に絵を描いてほしい」と一枚の詩をもって直訴した。以来、4〜5年の追っかけの末、ついに20枚の原画を描いていただくことができ

た。

訳あって、はじめの出版契約が挫折したとき、原画は丸木美術館に返され、保管されていた。私はなす術もなく、日夜、学校の仕事に追われた。どんな手立てもなかった。

ただ、何十回考えても、何年のときが過ぎてても、84〜85歳の俊さんが、左手に拡大鏡を握りしめて描いてくださった最後の絵を、この世に出さないという結論は私にはなかった。

飛行機に飛び乗り、アトリエで俊さんと向き合った。

「あなたは、たった一人になっても出しますか？」

「はい、たった一人になっても出します」と答えた。

すると、すっと立ちあがった俊さんが、原画20枚を入れた大きなカバンをもって現れ、私に手渡ししてくださった。

原画は飛行機に乗って博多にきた。けれど、いくつもの出版社から断られ続けた。そして、詩を書きあげてから10年後に、やっと絵本がこの世に生まれ出した。50代半ばの自費出版だった。

「むら」に出会って60年、かけがえない出会いがあった。忘れられない人たち。昔の教え子に「まだ、生きると！アハハ」と笑われながらも励まされ、まだ生きている。少しずつの自費出版。人生の最後に、絵本の「第4版」を出す予定だ。丸木俊さんや「むら」の人たちの思いを胸に秘めながら。

問 教育政策課

## 現地を訪ねて

市の「人権尊重のまちづくりサポーター養成講座」で、5年前、「寛政義民松原五人衆」の史跡を訪ねました。

そこで、1800年、「むら」(被差別部落)の14歳〜20歳の若者五人が、お芝居を見物中に暴れた武士を打ち据えたという罪で、黒田藩によって処刑された史実に触れました。参加した人は、当時の身分制の過酷さを実感し、現地に行き、地元の人話を聞くことの大切さも改めて感じました。

現地に出向き当事者の思いに触れることは、同和問題に限らず、さまざまな人権問題の解決につながるものです。

筑紫野市人権尊重の  
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、  
言われたりして、  
いやなことは  
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。